

Lord Jim の倫理的主題

杉 浦 広 治

序

Conrad は *Lord Jim* において等 4 章までをいわゆる omniscient author をして語らせ、その後は語り手 Marlow が聴衆を前に、あるいは書簡において語るという形式を採っている。いわゆる omniscient author が語る章においては、Jim は平穏なときには献身的な、また英雄的行為をすることを空想してはいても、現実になした行為が要求される事態が起きたとき、唯ぼう然として何もできない訓練生である。訓練後に海へ乗り出したときは、仕事を十分に愛することができず (*Lord Jim*, p. 8), 嵐で怪我をして船内に寝ているときは、密かに甲板に出て仕事をしなくてもよいことを喜び (*ibid.*, p. 9), 東洋の港においては、母国船勤めの仕事の厳しさを逃れて、“eternal peace of Eastern sky and sea” に浸って、“a small allowance of danger and toil” でもって安易な生活を送る船員達に魅力を感じ、母国へ帰らずに Patna 号に一等航海士の職を得るのである。彼は訓練生の時代より Patna 号に乗るまで “a stirring life in the world of adventure” を願い、想像の世界においては常に “an example of devotion to duty” でありながら、現実には何もできず、“severity of the daily task” をきらい、臆病にして怠惰な人物として描かれているわけである。しかし第 5 章より Marlow が語る物語においては、A. J. Guerard が “*Lord Jim*... is an intricate novel about possible emotional and moral responses to a relatively simple man, even to a ‘type’ of man.” [*Conrad the Novelist* (Harvard, 1958), p. 145] と言うように、Jim に対する彼の反応は複雑であり、*Lord Jim* を Jim の物語であると共に Marlow の物語にもし

ていると言えるであろう。本稿においては、この Marlow の一見混乱していると思われる、Jim に対する態度に注目し、そこに見られる倫理的問題を明らかにしようとするものである。

本 論

Marlow は Patna 号で起った事件を語る前に Jim について言う。

...he was outwardly so typical of that good, stupid kind we like to feel marching right and left of us in life, of the kind that is not disturbed by the vagaries of intelligence and the perversions of—of nerves, let us say. He was the kind of fellow you would, on the strength of his looks, leave in charge of the deck—figuratively and professionally speaking. I say I would,...(*Lord Jim*, p. 42)

又、次のように言う。

I liked his appearance; I knew his appearance; he came from the right place; he was one of us. He stood there for all the parentage of his kind, for men and women by no means clever or amusing, but whose very existence is based upon honest faith, and upon the instinct of courage...I mean just that inborn ability to look temptations straight in the face—a readiness unintellectual enough...but without pose—a power of resistance...an unthinking and blessed stiffness before the outward and inward terrors, before the might of nature, and the reductive corruption of men....(*Loc. cit.*)

Jim が “right place” から来た人間であり、恐怖や、人間を墮落させる誘惑に対して頑強に抵抗のできる人間であるという Marlow の Jim 観は、第4章までに見られる臆病者としての Jim、あるいは乗船中に嵐に遭い、怪我をし、そのために仕事をしなくてもよいことを喜び、本国船勤めの厳しさから逃れて Patna 号に乗った Jim とはまるで異ったものといえよう。しかし如何に Marlow が Jim の風采が気に入り、彼を “one of us” と弁護し、彼の行動が彼独自の弱点ではなく、一般の人間に共通の弱点に起因していることをほ

のめかしはしても、いざ航海士として800人の人命を見捨て、まだ沈没しない船から逃げた行為には責められる点が無いかどうか、そして彼は本当に普通の人間並に健全な判断力と勇気を持った人間であったかどうかという点になると極めてあいまいである。そもそも Marlow が Jim の逃げた行為に弁護の余地を見出そうとした根拠には Jim が船を捨ててボートに飛び下りたときの様子を “‘I had jumped...’ He checked himself, averted his eye... ‘It seems,’ he added... ‘I knew nothing about it till I looked up,’ he explained, hastily.” (*ibid.*, p. 107) と伝えていることが挙げられよう。つまり、Jim は我知らず無意識に、“Jump” と叫んでいる、すでにボートに乗り移った船長達の声を聞いて飛んでしまったという、彼の意識下の世界—inner self—に注目した心理的理由によるものである。しかし、難破した Patna 号を英雄的行動により救出した French officer が Jim について “And so that poor young man ran away along with the others...” (*ibid.*, p. 141) と述べ、事実をありのままに指摘したとき、Marlow の考えた Jim 弁護の根拠はもうくも崩れ去るかの如く、彼は苦笑せざるを得なかったのであり、次の如く言う。

And suddenly I began to admire the discrimination of the man. He had made out the point at once: he did get hold of the only thing I cared about. I felt as though I were taking professional opinion on the case. His imperturbable and mature calmness was that of an expert in possession of the facts, and to whom one's perplexities are mere child's-play. (*ibid.*, pp. 141-2)

そして Jim の裁判で証人として証言を行った Patna 号の二人の舵手について Marlow は語る。この二人の舵手は船に何か衝突の起きたことは知っていた。が、上司である白人から何も命令が無いため、そのまま舵輪を握っていた。すでに舵の効かなくなった舵輪ではあったが、職務に忠実にそれを握り、傍で船長を初めとする白人がろうばいして逃げ仕度に懸命な様子を冷静に眺めていた。そして証言台へ立った今も、白人が死を恐れて船を去ろうとしていたことを信じようとせず、彼等がそれまでに仕えてきた、そして彼等を忠実な船員と

して育て上げてきた多数の船長の名前をとうとうと並べ立てるといふ、この風変わりな証言が Jim を除いて凡ての聴衆を感動させたが、Jim は唯一人腰掛の端にむつとりと坐り、“this extraordinary and damning witness that seemed possessed of some mysterious theory of defence”を見上げもしなかったのである。この舵手と Jim を対比して見るとき、明らかに舵手は船員の模範であり、Jim は結局臆病風に吹かれて船を逃げた船員不適格者として聴衆の眼に映っていることを Marlow は見抜いているのである。彼は更に Jim の船上でのろうばい振りを語る。船首はすでに浸水しているのを知った Jim は何も知らずに眠っている巡礼の傍をよろよろと走った。そのとき巡礼の一人が彼の上着をつかんで“water”と叫んだ。Jim は“water”と聞いただけで、相手が何を言おうとしたのか確かめる暇もなく取り乱し、一刻も早くボートの所へ行こうと、手にしたランプで相手を盲滅法に殴り付ける。それでもなお彼に取りすがる巡礼が必死に叫んでいるのを聞いてみると、彼が水を欲しがっていることが漸く分る。このときの様子を Jim は、“The beggar clung to me like a drowning man. Water, water! What water did he mean?” (*ibid.*, p. 87) と語る。この言葉は、船の沈没の恐怖に戦いて、我を忘れた Jim の心理を物語るものであり、“water”と聞いたのみでろうばいし、逃げ出そうともがく Jim と、水をもらおうと彼にしがみつく巡礼との取り合せは、Jim の船員としての名誉も尊厳も一切を捨てた惨めな姿を戯画的に露呈しているものといえよう。Marlow はこうした Jim の行動に、背筋に“a creepy sensation”が走るのを感じ、又“subtle unsoundness”を感じるのである。

以上の如く Marlow は、Jim を“one of us”とは言うものの、反面二人の舵手にも劣る行動を取り、航海士としての職務を捨てた臆病者である事も認めているのであり、唯感傷的に Jim に同情を寄せているのではなく、Jim の“jump”について考えた結果について、“... I have a distinct notion I wished to find something. Perhaps, unconsciously, I hoped I would find that something, some profound and redeeming cause, some merciful ex-

planation, some convincing shadow of an excuse.” (*ibid.*, p. 49) と言い、更に、“Was it for my own sake that I wished to find some shadow of an excuse for that young fellow...?” と自問する。彼にとって Jim は、“destructive fate ready for us all whose youth—in its day—had resembled his youth” を暗示する若者であり、Jim の露呈した弱点は、如何に彼個人が欠陥の多い人間であったにしても、それだけで済まされる問題でなく、我々は “weakness that may lie hidden, watched or unwatched, prayed against or manfully scorned, repressed or maybe ignored more than half a lifetime” (*ibid.*, p. 41) から唯一人として安全でないと Marlow は考え、更にこの問題は “subtle and momentous quarrel as to the true essence of life” であり、“momentous enough to affect mankind’s conception of itself” (*ibid.*, p. 91) であるとさえ彼は考えたのであり、この点に彼の関心の一つが認められるわけである。が、現実には Jim に対して何か同情できる理由を見出そうとする努力は丁度 “a miracle” を探すように不可能なことであり、“creator” さえ匙を投げるものであることを見抜いており、我々凡てが機会さえあれば Jim の如く weaker self ともいうべきものを露呈する危険にさらされているが、彼に対して納得の行く弁解を見出し得ないと考えるところに Marlow はジレンマを感じていると言えよう。

ところで人間が異常な環境に置かれたとき、weaker self、あるいは我欲としての自我ともいうべきものが露呈されるという思想を Conrad が扱っているのは、すでに *An Outpost of Progress* (1897) や *Heart of Darkness* (1899) に見られる。*An Outpost of Progress* においては、現代社会の中では、何の取柄もない、無能な二人の白人も社会の制約、規範に縛られて何とか人並に生きることができたのであるが、文明から絶縁されたとき、弱点をさらけ出して破滅する。*Heart of Darkness* においては、Kurtz は文明社会の中では高い識見と崇高な理想を掲げる人間でありながら、一度文明社会の規律、制約、保護を断たれて未開の荒野に唯一人投げ出されたとき、残忍非道な人間へと急変し、無

力な未開人を搾取し、自己の利益のためには手段を選ばず、遂に身を滅ぼす。そしてこの作品では、語り手 Marlow が Kurtz に対して共感を寄せている。彼が Kurtz に共鳴したのは、Kurtz が荒野の中に在って、自己の心に内在する“evil”が如何に強いものであり、人間を破滅へと導くものであるかを悟り得た人間であると見なしたためであろうし、彼は“Soul! If anybody had ever struggled with a soul, I am the man.”〔*Youth, Heart of Darkness, the End of the Tether* (London, 1961), p. 144〕と自負する。都会に戻った Marlow は、一般市民が保護された社会の中で、彼自身や Kurtz が持ったような、人間に内在する弱点や悪性に対する“complete knowledge”を持たずに、無自覚な状態で生活している様子が彼には“outrageous flauntings of folly in the face of a danger it is unable to comprehend.” (ibid., p. 152) に思われてならず、“offensive”な感情を抱く。ここにおいて彼は、人間に内在する弱点を悟り、それが人間を崩壊へと導く、恐るべきものであることを見極め、それに基いて、如何に弱点を克服して行くべきか、如何に人間は生きるべきかの問題を探求することの重要性をほのめかしているといえよう。が、彼はこの問題には手をつけないままで物語を終わっている。同様に inner self を扱ったもので、*Heart of Darkness* の Marlow のように人間の心理に注目し、人間の持つ悪性、あるいは弱点を悟り、衝撃を受けるという経緯と似た内容を持つものとしては Stevenson の *Dr. Jekyll and Mr. Hyde* を挙げることができるであろう。Jekyll は自己の魂の中に“lower elements”の存在を認め、彼が本来の Jekyll と“original evil”の二元の世界より構成されており、この両者の闘争が人間の宿命であり、“curse of mankind”であることを悟る〔*Dr. Jekyll and Mr. Hyde and the Merry Men* (Everyman's Lib.), pp. 49-50〕。Lanyon はこの事実を目撃して深い困惑を覚えて言う。

I have had a shock and I shall never recover.... Well, life has been pleasant; I like it; yes, sir, I used to like it. I sometimes think if we knew all, we should be more glad to get away. (ibid., p. 27)

又趣向の変っているものでは Melville の *Moby Dick* を挙げることができるであろう。Ahab が白鯨に対して抱く感情について、語り手 Ishmael は語る。

The Whit Whale swam before him as the monomaniac incarnation of all those malicious agencies which some deep men feel eating in them. ... He piled upon the whale's white hump the sum of all the general rage and hate felt by his whole race from Adam down; and then, as if his chest had been a mortar, he burst his hot heart's shell upon it. [*Moby Dick* (Everyman's Lib.), p. 160]

Ishmael によれば、Ahab は人類の初めより人間が有している “malicious agencies” の存在を認め、それが白鯨に姿を変えたものと見なしており、この白鯨に闘争を挑む Ahab の姿は、人間の持つ弱点や邪悪さを自覚した人間が深く苦悶する姿として Ishmael の眼には映っているわけである。

Lord Jim の Marlow が Jim の行動の中に人間の持つ弱点を認め、その測り知れぬ恐ろしさに困惑するといった経験は、今ここで挙げた *Heart of Darkness* の Marlow, *Dr. Jekyll and Mr. Hyde* の Jekyll や Lanyon, *Moby Dick* の Ahab の経験と似た性格のものといえよう。しかし、注目すべきことは、*Lord Jim* の Marlow は唯彼等と同様に inner self の存在に気付き、悲憤の念に駆られるといった経験のみで終ってはいないということであろう。Marlow は Jim の裁判の判事を勤めた模範的船長 Brierly が意外にも Jim について、“Why are we tormenting that young chap? ... Why eat all that dirt? ... Well, then, let him creep twenty feet underground and stay there! By heavens! I would.” (*Lord Jim*, pp. 64-5) と言い、裁判の直後に自殺したと語る。自殺の理由について Marlow は言う。

No wonder Jim's case bored him, and while I thought with something akin to fear of the immensity of his contempt for the young man under examination, he was probably holding silent inquiry into his own case. The verdict must have been of unmitigated guilt, and he took the secret of the evidence with him in that leap into the sea. (*ibid.*, p. 56)

又、French officer との会話では彼が “Man is born a coward. It is a

difficulty—*parbleu!* It would be too easy otherwise. But habit—habit—necessity—do you see?—the eye of others...the honor—the honor, monsieur!... The honour...that is real—that is!” (*ibid.*, pp. 143-4) と語ったと Marlow は言う。続いて Bob Stanton が沈みかけた船からどうしても離れようとしないう客をなおも助けようとしている内に船と共に沈んだ話、Jim について、“You must see things exactly as they are—if you don’t, you may just as well give in at once. You will never do anything in this world. Look at me. I made it a practice never to take anything to heart.” (*ibid.*, p. 158) という Chester の話、そして Jim の身の振り方について最後に Marlow が相談に行く Stein の話——これら一連の話は Jim を主人公とするストーリーに直接関係のない、それぞれに別個なエピソードでありながら、Marlow が Stein に対して、Jim についての相談の問題は “how to get cured” ではなく、“how to live” であると語っているように、弱みを持つ人間がどのように行動し、あるいは生きて行けばよいかという問題に対するさまざまな意見をそれらのエピソードが与える結果になっているのであり、Marlow の関心の一つがこの問題にあることを示していると言ってよいであろう。とりわけ彼に対して圧倒的な力をもって迫って来る Stein の存在は注目すべきであろう。Stein は言う。

A man that is born falls into a dream like a man who falls into the sea. If he tries to climb out into the air as inexperienced people endeavour to do, he drowns—*nicht wahr?*... The way is to the destructive element submit yourself, and with the exertions of your hands and feet in the water make the deep, deep sea keep you up. (*ibid.*, pp. 207-8)

この Stein の言葉によれば “sea” は “dream” と “destructive element” にたとえられているが、では “sea” に対する “air” は何を意味するであろうか。“dream” に対応する reality であろうか。又、そうとするなら reality に立ち向かうことが何故 “dream” におぼれることになるのか、彼の言葉を字句通

りに追って行くと、その比喩的表現に惑わされ、A. J. Guerard が指摘した如く、“rhetorical ambiguity” (*Conrad the Novelist*, p. 165) が感じられるわけである。しかし唯一つ明らかなことは彼が“dream”を追い求めることを重視していることであろう。夢、つまり理想的なるものを追求し続けて“romantic”な生涯を送り、人間の生き方は、“To follow the dream, and again to follow the dream—and so *ewig—usque ad finem*” (*Lord Jim*, p. 208) であると熱誠を込めて語る Stein が butterfly を捕えることに無上の喜びを感じるところから見れば、この butterfly は T. Tanner が言う如く、“the image of all the fine, noble and beautiful things that sensitive men dream of doing, dream of becoming.” [*Conrad: Lord Jim* (London, 1963), p. 41] と見てもよいであろう。しかし、なるほど Stein の部屋には butterfly の標本箱が並んではいたが、同時に butterfly とは違って、無様な“beetle”の標本棚が部屋を取り巻き、この部屋が“Coleoptera”と書かれた金文字に輝く“catacombs of beetles”に囲まれていることは注意すべきことであろう。この“beetle”は何かを意味するのではないであろうか。Jim に悪意を抱き、陰険に彼を陥れる Cornelius の歩き振りが丁度 beetle の歩き振りである。

Cornelius was creeping across in full view with an inexpressible effect of stealthiness, of dark and secret slinking. He reminded one of everything that is unsavoury. His slow laborious walk resembled the creeping of a repulsive beetle.... (*Lord Jim*, p. 277)

彼は又“a loathsome insect”と述べられ、更に“He bolted out, vermin-like, from the long grass....”(ibid., p. 315)と語られており、彼は a repulsive and loathsome beetle のイメージで語られているといえるであろう。Jim は Cornelius に冷静な眼を向けず、Cornelius が Jim を評して“He’s no more than a little child here—like a little child—a little child.” (ibid., p. 318) と言う如く、Jim は唯自己の夢の世界のみに閉じこもり、悪計を企てる Cornelius を含めて、広く現実を見極めることができないことが結局 Jim の破滅を招い

たとも言えるであろう。かくして butterfly が美を代表するとすれば beetle は醜を意味し、前者が夢、理想であれば、後者は醜いものを包含する現実といったところであろうか。このように見るとき Stein は唯夢のみを追う romanticist にあらず、beetle の収集に象徴されるように現実にも眼を向ける冷静さを持った人物として浮かび上がって来るのである。その結果、Stein の説く “to follow the dream” は唯夢を追うのではなく、そこには現実を直視するという意味が込められていると考えられるであろう。

Marlow にとっては Stein の意見は “The whisper of his conviction seemed to open before me a vast and uncertain expanse...” (*ibid.*, p. 207) というように、納得の行く明解なものではない。が、Stein の存在によって、“how to live” を中心とする倫理的テーマが強く打ち出されており、“how to live” に関心を示す Marlow の姿勢は、*Heart of Darkness* において人間の弱みを Kurtz の内に発見して唯驚くばかりの Marlow、あるいは “This (original evil), too, was myself” (*Dr. Jekyll and Mr. Hyde and the Merry Men*, p. 51) と考え、“evil” にも魅せられつつ、破滅への道を歩む Jekyll や、これを見て驚くばかりで死を待つ Lanyon、更に、Ishmael の見るところによれば人間の弱みに対して憎しみを感じ、その感情を見当違いにも鯨に対する敵意に転化する狂気の Ahab 等に比べ、人間が生きて行くための積極的な姿勢とすることができであろう。

ところで Conrad は *Lord Jim* 執筆の前年に友人にあてた書簡でしばしば人間の不完全性に触れ、“If you believe in improvement (of a humanity) you must weep.” (*Life & Letters* (London, 1927), I. p. 226) と言い、又 “Alas! what you want to reform are not institution,—it is human nature. Your faith will never move that mountain. Not that I think mankind intrinsically bad. It is only silly and cowardly. Now you know that in cowardice is every evil.... But, without it, mankind would vanish. (*ibid.*, I. p. 229) と言い、更に、“Our refuge is in stupidity, in drunkenness of all

kinds, in lies, in beliefs, in murder, thieving, reforming, in negation, in contempt—each man according to the promptings of his particular devil.” (*ibid.*, I. p. 226) とさえ語っており、人間の属性に宿命的な欠陥のあることを認め、それが改善不可能であるという、pessimistic な Conrad の姿勢が見られるわけであるが、改善不可能であるならば、人がよりよく生きるためには何をなすべきかという問題が Conrad 自身にとって切実な問題であったに違はなく、人間の醜惡な一面を自覚するという *Heart of Darkness* の Marlow と同じコースをたどりながらも、*Lord Jim* の Marlow が唯それだけに留まらず、“how to live”の問題への comment となるべき数数の人物と彼等の意見の紹介を行い、更に、船を捨てた過誤によって傷つけられた自尊心を回復すべく、行為の理想を求める Jim の Patusan における行動へと物語を発展させている背後には、Conrad のこうした強い倫理的欲求があるものと考えられよう。

外界から完全に断絶され、孤立した Patusan は敏感な感受性と高尚な理想を持つ Jim にとって、彼の想像力を働かす格好の場所と言えよう。彼は対立する二つの勢力の一方に味方し、戦勝により村人の信望を集め、彼自身 “I have got back my confidence in myself—a good name.” と自負する如く、彼にとっては Patusan は新天地であるわけであるが、この意気揚揚とした Jim とは逆に、Marlow の語る Patusan のイメージが暗く、陰湿なのは何故であろうか。Jim の家から見る月は “a yawning grave” から勝ち誇って逃れるように昇る、“an ascending spirit” の如き月であり、その光は “the ghost of dead sunlight” のようであり、川の流は “silent and black as Styx” で、太陽の光さえも “an abyss” に落ちる如くであり、更に次の如く語られる。

...the interlaced blossoms took on shapes foreign to one's memory and colours indefinable to the eye, as though they had been special flowers ...grown not in this world, and destined for the use of the dead alone.
... The lumps of white coral shone round the dark mound like a chaplet

of bleached skulls. (*Lord Jim*, p. 314)

これに対して Marlow は Patusan を去って、外の世界に出た瞬間に言う。

I breathed deeply, I revelled... in the different atmosphere that seemed to vibrate with a toil of life... I let my eyes roam through space, like a man released from bonds who stretches his cramped limbs, runs, leaps, responds to the inspiring elation of freedom. 'This is glorious!' I cried... (*ibid.*, p. 322)

Jim にとっては彼の自尊心を満足させてくれる新天地である Patusan も Marlow にとっては現実の世界ではなく、死臭の漂う underworld ともいうべきものであり、西洋人たる Jim が本来住むべき所ではなく、従って Patusan における Jim の成功を手放して喜ぶことができない Marlow の心境をその描写が物語っていると言えるであろうし、こうした一連のイメージにより、本来 Jim が属すべき社会を逃避して Patusan に埋もれた “buried straggler” であることを認めているわけであろう。

しかし、Marlow が如何に Jim を “straggler” と見なさうとも、“I must go on, go on for ever holding up my end, to feel sure that nothing can touch me.” と言い、村人のために尽そうとする彼の行動について Marlow は言う。

...the last word is not said,—probably shall never be said. Are not our lives too short for that full utterance which through all our stammerings is of course our only and abiding intention? I have given up expecting those last words... There is never time to say our last word—the last word of our love, of our desire, faith, remorse, submission, revolt... My last words about Jim shall be few. I affirm he had achieved greatness... (*ibid.*, pp. 218-9)

名誉ある行動をすることを常に夢見て、Patusan がたとえ Jim を育てた文明社会の思考様式を受けつけない未開地ではあっても、彼なりに村人のために尽し、理想とする行為を追い続ける態度に対しては、あながちこれを落伍者の自

己満足的な空しいあがきとは見なすことができず、人間の行為に最終的な結論を下すことはできなくとも、Jim の行為がともかく “greatness” をなしとげた点を認めているわけであり、更に Jim について、“I stood there thinking mostly of the living who, buried in remote places out of the knowledge of mankind, still are fated to share in its tragic or grotesque miseries. In its noble struggles, too...” (*ibid.*, p. 314) と言う。“those events... that show in the light of day the inner worth of a man... and the secret truth of his pretences, not only to others but also to himself” (*ibid.*, p. 8) の一つの試練に遭遇し、思いがけずも自己の弱点たる “another possessor of his soul” の存在を知らされ、その恐ろしい影から逃れるべく、際限のない努力をする Jim に対して Marlow は、Jim 個人でなく、人間共通の悲劇的な不幸と苦闘を荷なった姿を見ているわけであり、Jim の Patusan における活躍に対する Marlow の受け止め方は複雑である。Marlow は Patusan を離れるとき、海岸で見送る Jim を見ながら言う、

He was white from head to foot, and remained persistently visible with the stronghold of the night at his back, the sea at his feet, the opportunity by his side—still veiled. What do you say? Was it still veiled? I don't know. For me that white figure in the stillness of coast and sea seemed to stand at the heart of a vast enigma. (*ibid.*, p. 327)

Jim が専ら英雄の如く村人から信頼され、讃美されるに至ったことが、彼が名誉を取りもどす “opportunity” を既につかんだことになるのかどうか Marlow は見極めることができない。Jim が “a vast enigma” の中心に立つと見なすのは、Jim が必ずしも “enigmatic” な人物であることを示すことにはならないであろう [Cf. “On Lord Jim”, *The Art of Joseph Conrad* (Michigan, 1960), p. 142]. Marlow は Jim が何物にも直面することを恐れず、ひたすらに理想的行為を求める “simple” な男であることを認めており (Cf. *Lord Jim*, p. 92), Marlow にとって “enigmatic” なものは、Jim ではなく、Jim が本

来属すべき社会から逸脱し、未開地に埋もれて、ひたむきに英雄的行為を渴望する生き方をどのようににはっきりと価値判断すべきか分からない Marlow 自身の複雑な心であると見るべきであろう。

ところで Jim が求める行為は、彼が“something's paid off—not much.”と言うところに見られるように、船を捨てるといふ、社会の信頼に対する一種の裏切りをしたという過誤の意識に悩み、その償いとなるための行為でもあるわけである。Conrad 自身子供時代に船乗りになる夢が忘れられず、帝政ロシアの圧政に苦しめられていた母国 Poland を捨てたことについて “I understood no more than the people who called upon me to explain myself. There was no precedent. I verily believe mine was the only case of a boy of my nationality and antecedents taking a, so to speak, standing jump out of his racial surroundings and associations.” [*The Mirror of the Sea and A Personal Record* (London, 1965), p. 121] と述べているように、形こそ違っているにしても、Jim と同じく衝動的に “jump” をし、“a series of betrayals” を行って来たという意識が彼にあり、裏切りとそれによる悩みの問題は Conrad にとって切実な問題であると考えられるわけであるが、この裏切りによる過誤の念を取り払うための苦闘を描いているという面から見た場合には *Lord Jim* より少し前に書かれた *The Lagoon* (1897) と *Karain; a Memory* (1897) に既にその素地を見出すことができるであろう。*The Lagoon* において Arsat は、彼の仕える王の下女と恋に陥り、彼女を奪って兄と共に逃げ、逃げる途中には絶大な敬慕の念を抱く兄をも見捨てた。彼が王の信頼を裏切り、彼の社会の掟を踏みじりに加えて、兄をも見殺しにするという、多くの面で裏切り行為をしたことは、丁度 Jim が800人の巡礼を見捨てて社会の信頼を破った行為に類似したものであり、Arsat の一途な恋情による背信行為は、Jim の場合と同様に “It is an almost unconscious surrender to his weaker self.” [T. E. Boyle, *Symbol and Meaning in the Fiction of Joseph Conrad* (London, 1965), p. 61] とすることができるであろう。Arsat は兄を見捨てたことに対する悔悟

の念を、恋人を激しく愛することにより、そして恋人が死んだ後は、兄を殺した部族に対して復讐心を燃やすことによって紛らすことができた。 *Karain; a Memory* においても Karain は恋の情熱のために親友を打ち殺し、彼を裏切った。彼の亡霊に悩まされる Karain は、白人から魔よけとしてもらった、わずか一枚の硬貨によって心の安静を取りもどすことができた。しかし、Arsat や Karain と同様に weaker self に負け、傷つけられた自尊心と過誤の意識に悩む Jim は、Karain のように無知な人間でなく、文明の世界に育ち、それ相応の知性を備えた近代英国人であり、Arsat 程に単純ではなく、裏切りの償いとして攻撃する、はっきりした“enemy” もいず、Karain は白人に対して“Give me your protection—or your strength. . . . A charm . . . a weapon.”と頼むが、Jim には助けを求める相手はいず、又 Karain を即座に救ったような便利なお守りもない。Jim の“enemy”なるものを強いて探せば、それは衝動的に彼に臆病な行動をさせた“another possessor of his soul”であり、それは彼自身の中にあるのであり、Jim 自身“I must go on, go on for ever holding up my end. . . .”というように、自力によって償いをして行く以外に救われる道はないであろう。が、Marlow が“Was it (the opportunity) still veiled?”と問いかけるように、何をもって立派な行為、そして又償いの行為と見なしたらよいか Marlow は判断しかねていると同時に、そうした判断の難しさを訴えていると言えるであろう。

無法者 Brown の奸計により Doramin の息子 Waris は殺され、村人の生命の安全を彼の首に賭けて請け合っていた Jim が責任を感じて、自らの死によってその償いとすべく、進んで Doramin に殺される行為は、Marlow が“Not in the wildest days of his boyish visions could he have seen the alluring shape of such an extraordinary success! For it may very well be that in the short moment of his last proud and unflinching glance, he had beheld the face of that opportunity which, like an Eastern bride, had come veiled to his side” (*Lord Jim*, pp. 406-7) というように、村人に冒険

され、首を賭けて請け合ったことに失敗した以上、死をもってわびることは、彼等の掟に従い、信頼に答える道であり、Jim 本人にとっては名誉ある行動であると考えられたであろう。一方、Marlow は Jim の物語に興味を示した友人に対して “You said also...that ‘giving your life up to them’ (*them* meaning all of mankind with skins brown, yellow, or black in colour) ‘was like selling your soul to a brute.’” (*ibid.*, p. 329) と言うように、白人社会の観点から眺めたとき、Jim の行為が如何にも芝居じみた、愚かな行為に見えるということもあるであろう。しかし Marlow は、Jim が自ら求めて得た妻を見捨てて、殺されると分っていながら Doramin の許へと去ったことについて、“You must forgive him.” と Jim の妻に言い、又、次のように考える。

She had said he had been driven away from her by a dream—and there was no answer one could make her—there seemed to be no forgiveness for such a transgression. And yet is not mankind itself, pushing on its blind way, driven by a dream of its greatness and its power upon the dark paths of excessive cruelty and of excessive devotion?

彼はあくまで Jim を弁護しようとする姿勢を見せているわけであり、Jim について、“To bury him would have been such an easy kindness! It would have been so much in accordance with the wisdom of life, which consists in putting out of sight all the reminders of our folly, of our weakness, of our mortality; all that makes against our efficiency—the memory of our failures, the hints of our undying fears...” (*ibid.*, p. 170) と言い、“wisdom of life” に従わず、Jim が死ぬまで彼の生き方に関心を持ち続け、人間の弱点を見て見ぬ振りをすることなく、それを有しながら人間が生きて行く方法を、丁度 Conrad 自身 “It’s strange how I always...disliked the Christian religion, its doctrines, ceremonies and festivals.” (*Letters from Joseph Conrad*, ed. by E. Garnett, p. 185) という如く、彼にとって神は死ん

でいるのに似て、Marlow は神に救いを求めず、あくまで人間の次元において探求しているといえるであろう。

この探求の態度は、東洋の海と青春の魅力を歌いあげた *Youth* における Marlow には見られず、*Heart of Darkness* の Marlow によって、次の問題としてほのめかされ、*Lord Jim* の Marlow に至って初めて見られるものであり、又 weaker self によって引き起こされる裏切り行為とその償いの苦しみという面からは、Arsat が裏切りによる精神的苦痛を、兄を殺した部族という具体的な “enemy” に対して敵意を燃やすことにより昇華させた *The Lagoon* や、Karain が同じ精神的苦痛から、白人にもらったお守り一つで見事に救われた *Karain: a Memory* より更に進んで、*Lord Jim* において、このテーマが初めて現代性を備えて現実的な設定の中で取り扱われているのであり、*Lord Jim* においては、weaker self に負けて過誤を犯した者が如何にして償いの生活をするかという問題を含めて “how to live” の問題を現実の問題として考えようとする Conrad の態度がうかがわれると言えるであろう。

第4章までに見られた Jim は、英雄的行為を常に望みながら、現実にはそれを実行できない臆病者に過ぎず、Patna 号から逃げた行動もこうした Jim には当然予測できることとも言えるであろうが、Marlow は彼に同情し、彼を弁護しようとし、更に彼が死に至るまで、彼の生き方について “I am telling you so much about my own instinctive feelings and bemused reflections...” (*Lord Jim*, p. 218) と言うように、あれこれと思い悩むところには、Jim に同情的で倫理的問題に関心を持つ人物として Marlow の人柄が強調され、*Lord Jim* を、Jim を主人公とする単純なストーリーを持つ物語であると共に Marlow の物語にもしており、Marlow をそのまま Conrad 自身であるとは考え難い。が、Marlow が最後に “But we can see him, an obscure conqueror of fame, tearing himself out of the arms of a jealous love at the sign, at the call of his exalted egoism. He goes away from a living woman to celebrate his pitiless wedding with a shadowy ideal of conduct.” (*ibid.*,

p. 407) と言い, im を “Jan obscure conqueror of fame”, 彼の死を “a shadowy ideal of conduct” としか言えないところには, Jim の死を如何に受け取るべきか, 又 “shadowy” ならぬ真の ideal of conduct は何かという問題と取り組み, 又その問題を我々に訴える Conrad 自身の姿を見ることが出来るであろう.